空

空　平成26年4月20日発行　第12巻2号　通巻第54号

2014・4・5

SORA 54号

福岡　亀井紀子

待春や柱時計のぼんと鳴る
首沈む戦場とかや冬の鳥
折鶴や弥生の海にたゆたへり
島人の隠れし洞や野水仙
剪定や庭に力の満ちて来し

大阪　青木朋子

向き合うて数の子を噛む音ばかり
武具を売る出店もありて弓始
水に立ち水を飲みゐる番鴨
裸木や空へ投網を打つごとし
猫の座となつてしまひぬ冬帽子

東京　今井春生

柴又に飴切る音や雪催ひ
春光を纏ひて古着古道具
イエス像に涙の跡や草芽吹く
ものの芽の土より出でて汚れなし
薔薇の窓よりの光やウエディング

東京　山田正子

楪や水のおいしい国に生れ
霜柱月の光に育ちゆく
吹雪く夜は無声映画の街となり
埋火に父と過せし月日かな
春の窓パン屋の立てるフランスパ

PDF= 俳誌の salon

福岡　吉村摂護

重ね持つ病は三つ年を越す
代り映えしない二人のお正月
屠蘇をくむ二杯目よりはぐい飲みで
里山を隈無く染めて春の雪
初花や急げば踊る足二本

新宮　井浦美佐子

家族みな予定なき日の鮟鱇鍋
冬籠すぐに目の行く写真かな
日当たりて産毛たてたる辛夷の芽
田起しや新幹線の突き抜けて
今はなき女子寮しのぶ雛の段

福岡　田代貞枝

竹の柵置いて結界節分会
蛇出づる屋敷神とはいふものの
剪定の音に紛れし鳥の声
白魚の引き上げられし水の跡
鳥曇り昔茶の間に糸車

須恵　苑実耶

寒明けや各戸に配る殺鼠剤
雪解けて土塊さへもいとほしく
生涯を僻地に暮らす花大根
飯粒を撒けばたちまち雀の子
傷つけて傷つけられて恋の猫

PDF= 俳誌の salon

山梨　野畑さゆり

三日分届く朝刊雪深し

雪掻きに声かけあへる晴間かな

雪ごもり食糧あるかと友の声

茂吉忌や春雪掻きて終りたり

深雪晴帽子真赤な地蔵尊

PDF= 俳誌の salon

空作品抄――柴田佐知子抽出

春風と夢のあはひを生きて母　高倉和子
鶯の初音駅員いつもひとり　中田みなみ
春満月たれかれに死をそそのかす　荒井千佐代
豆打つや逢魔が刻を見極めて　服部早苗
よく動く兎の口や日脚伸ぶ　柴田志津子
如月の脚をそろへて竹林　だいじみどり
福寿草覗く人影重なれり　野上杏
勝独楽の勝ちてさみしく廻りをり　矢野百合子
髪切つて正月の来るはやさかな　栗原京子
退院もままにならざるチューリップ　高倉恵美子
探梅へさそふ日和と思ふのみ　山内碧
男ごころは戻りやすし山桜　戸栗末廣
南より冬日責めくる盆の窪　鳳蛮華

PDF= 俳誌の salon

すかんぽや村の鳥居は小さくて　樋口みのぶ
嫁が君走りて闇の新しき　田岡千章
晴れの日も長靴が好きしやぼんだま　小林朱夏
冬櫻近藤勇の大き口　古川夏子
シーサーの守る島民鳥帰る　秋千晴
島人の隠れし洞や野水仙　亀井紀子
向き合うて数の子を噛む音ばかり　青木朋子
春光を纏ひて古着古道具　今井春生
霜柱月の光に育ちゆく　山田正子
代り映えしない二人のお正月　吉村摂護
家族みな予定なき日の鮟鱇鍋　井浦美佐子
傷つけて傷つけられて恋の猫　苑実耶
雪ごもり食糧あるかと友の声　野畑さゆり
百畳に正座三百着ぶくれて　天谷翔子
銀杏の夜どほし落つる百姓家　吉田葎
腹の水飛ばす海鼠を切りにけり　長節子

PDF= 俳誌の salon

長き長き貨車を通して山眠る　織田高暢
蜂の巣を爆弾のごと外したり　秋千晴
聖金曜神父の衣は血の色で　白水良子
アルバムを開けば昭和蝶の昼　宮井知英
種芋を出したる穴の無聊かな　原友子
謂れなき風には折れぬ枯尾花　押田裕見子
通りしは郵便夫のみ藪椿　小川涼
真青なる空一枚の初景色　松田明子
豆まくや鬼にされたる下宿人　青木朋子
肩車されて鬼打つ豆を撒く　石川叔子
出入口汚す燕を待つてをり　小林朱夏
噴煙は天をおほへりいぬふぐり　あさなが捷
ふらここの軋む重さになりにけり　仲里奈央
寝床より母が手を出す紙風船　田邊豊子
鳥帰る空に人なき観覧車　橋本知笑
恋初めし時は戦時下青き踏む　田代貞枝

PDF= 俳誌の salon

山道やライトを返す狸の目　清水量子
梅明り手入怠たりなき老舗　池田華甲
立子忌の丸ごとゆでるキャベツかな　えとう樹里
病む人へ思ひ出の野の野蒜摘む　山口弘子
春の風振りほどく手の強さかな　乾有杏
寒桜真つ直ぐに立つ母の杖　林徹也
剪定や快晴の富士正面に　野畑さゆり
ヒヤシンス水の力で匂ひけり　山田正子
人日や犬の療養食を買ひ　森俊人
裸木の屹立吾をおびやかす　酒井みち子
軽く雨過ぎし路面の春めける　遠藤のり子
卒園式子の列はすぐ歪み　井上義郎
子安石返してゐたる初詣　ふじの茜
山窪の日向の匂ひ蕗の薹　川崎よしみ
逃水の前を野良猫突つ走る　森真二

PDF= 俳誌の salon

空集

柴田佐知子選

寒雷や走り根道を盛り上ぐる　粕屋　吉田　葎
銀杏の夜どほし落つる百姓家
雪合戦先生最もはしやぎをり
川普請どぜう掴みに変はりけり
花氷迷子放送繰り返す
大寒や隈ひとつなき時計店
湯豆腐や励まし臍に落ちていく
木枯の荒ぶ補聴器はづしけり　須恵長節子
どうしても牡蠣小屋の椅子傾きぬ
衰へを笑ふほかなし藪柑子
強さうな子の見当らぬ宮相撲
腹の水飛ばす海鼠を切りにけり
猿廻し来てゐる杜へ子等走る
風花や乗り込んで来し弓道部　兵庫　織田高暢
重心の狂ひし独楽をつかみけり
極太の梁美しや冬構

戻り来し夫に焚火の匂ひかな　京都　天谷翔子
枕固し夜通し霜の育つ音
流れ来しものを加へて川焚火
檻の鷹いくたび呼べど振り向かず
百畳に正座三百着ぶくれて
山よりも高き卒塔婆冬の鵙
寒禽のこゑ高きより遥かより

PDF= 俳誌の salon

長き長き貨車を通して山眠る
百合鷗遊ぶ真冬の波高し
光源氏あらはれさうな春灯
菜の花にパラグライダー降りて来し
棒鱈を敵のごとく叩きゐる
餌台も麒麟の高さ楠若葉
電柱に鵲の巣も動物園
蜂の巣を爆弾のごと外したり
赤き鯉口も紅色うららかに
髪上げて紅引き直す雪女
豆撒きや牙を天地に鬼の面
ゆく雁や壁にかけある火事装束
会釈してひとの軒借る春しぐれ
鯰五郎の目がこちら向く宿の膳
櫂立てて覚ます釉薬初雲雀
病みし身は骨の重さに二月来る

粕屋　秋　千晴

福岡　柴田志津子

福岡　白水良子

春よ来いどこからでもと髪染むる
聖枝祭亡き子の如く枝を抱く
聖金曜神父の衣は血の色で
厚着の夫病みてイエスに似てきたる
干し柿や去年と同じ軒と樟
黄砂来る壁画の舟は帆を張りて

糸田　宮井知英

遠霞ずり落ちさうな昼の月
何にでも口出す夫百千鳥
アルバムを開けば昭和蝶の昼
花桃や今も大事に母子手帳
満開の桜の闇を潜りけり
種芋を出したる穴の無聊かな

千葉　原　友子

墓に畑に囀りの紙ふぶき
春泥を大きく跨ぎ獣医来る
蛇出ててしばし母屋を窺へり
春一番妻を阿修羅にモンローに

PDF= 俳誌の salon

空作品評

柴田佐知子

退院もままにならざるチューリップ　高倉恵美子
春風と夢のあはひを生きて母　高倉　和子

「空」創刊同人の高倉恵美子さんが、三月二十二日に亡くなられた。数年前から療養のため入院されていた。辛い日も過ごされておられたことと思われるが、投句が途切れることは一度も無かった。見事な姿勢である。一句目は思うようにならぬわが身をまっすぐに詠出されている。下五に据えられだ〈チューリップ〉によって、恵美子さんの穏やかで純粋なお人柄が偲ばれる。

二句目、企業に勤務する和子さんは、週末には必ず故郷で療養されている母の恵美子さんの元へ通われていた。お歳を召された母上。このように悲しみを深く秘めて詠まれた〈春風〉の句を私は知らない。

よく動く兎の口や日脚伸ぶ　柴田志津子

兎の口元が自ずとクローズアップされて見えてくる。ごく普通の光景なのだが、「日脚伸ぶ」という季語との取り合わせによって、いきいきとした詩の息吹が吹き込まれた。

勝独楽の勝ちてさみしく廻りをり　矢野百合子

相手の独楽を跳ね飛ばして、尚も廻り続ける勝独楽に〈さみし〉さを感じた作者の繊細な感覚が、句に静かな輝きを与えている。単なる独楽の姿を越えた象徴的な深みも感じる作品。

髪切つて正月の来るはやさかな　栗原　京子

正月は格別な晴れの日である。子供の頃は新調した着物や下駄で新年を迎えたものだ。出だしの〈髪切つて〉がいい。慌しく過ぎてゆく年末の雰囲気が〈はやさかな〉と切れよく言いとめられている。

探梅へさそふ日和と思ふのみ　山内　碧

梅の花は春季であるが、春にさきがけて咲く梅を山野に探す〈探梅〉は冬の季語。日向に野梅の一輪でもひらいているかも知れないと、冬晴れの空を見ている作者であろう。〈探梅へ誘ふ日和と思ふのみ〉とはうまい。春へ向かう季節の天地の相が、さりげなく、しかも実感をもって表現されている。（以下略）

PDF= 俳誌の salon